群馬県北毛地域における絹遺産の探求と教育・観光の活性化

群馬蚕糸絹遺産研究会

１　研究の実施状況

（１）　研究期間：2020年度
（２）　実施場所：群馬県内（主として北毛地域）
（３）　研究会のメンバー：５名
　　（高崎経済大学大島ゼミナール学生・OB：代表＝大島登志彦、関上巧、関口実李、石関正典、吉田豊）
（４）　研究内容
・絹遺産の見学調査
・新たな絹遺産の探求
・学校教育における絹遺産の活用と課題
・学校統廃合の歴史的変遷と実態調査
・絹遺産の観光に向けた取り組み
・絹遺産を主体とした観光モデルコースの策定

２　研究の成果

北毛地域の絹文化に関わる特性を考察し、関連遺産のフィールド調査を主体に進めた。新型コロナウイルス感染拡大の最中、とりわけ、年末から年始にかけては、群馬県の警戒レベルが引き上げられるなど、十分な調査ができない環境ではあったが、絹遺産の現況調査と新たな遺産の探求もでき、絹文化における北毛の位置づけを見いだすことができたと考える。今後絹文化や遺産を学校教育に有益に取り込むとともに、観光資源としての活性化を目指すことが重要だと考える。

【別添報告書】

群馬県北毛地域における絹遺産の探求と教育・観光の活性化

１．北毛地域における特異な絹遺産

（１）日本遺産「かかあ天下 ―ぐんまの絹物語―」

「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録された翌2015（平成27）年、地域に点在する相互に連携した文化遺産群を日本遺産に認定する制度が開始された。世界遺産より多数の資産を含めてストーリーを持たせる性格を強めたことが特徴だと考える。群馬県では、その初年の2015年、絹生産で家計を支えた女性たちを基軸として、県内４市町村に跨がる12の資産群が、表題の日本遺産として認定され、北毛地域では、次の２町村における３資産が含まれた。

・中之条町（冨沢家住宅、六合赤岩伝統的建造物群保存地区）
・片品村（永井流養蚕伝習所実習棟）

いずれも地域に根ざした特徴ある遺産だと考えるが、互いに離れてお互いの連携は乏しく、観光スポットとしてもまだ知名度は不十分と考える。個々の資産の考察は、多くの資料で紹介されてきたので、本稿では、公共交通による訪問は困難な部分を重視して、３章で提案する観光モデルコースの中で、自家用車や観光巡回バスに組み込んで考察していく。

日本遺産は、2020年までに全国各地の遺産群が104件認定されて一段落したと言われるが、群馬県内では、表記の他、館林市の「里沼」が認定されている。

（2）天蚕の飼育とその製品（中之条町山田 登坂昭夫様宅）

天蚕とは、野生の繭を総称した呼称で、椚や楓などの葉を食べて、緑色の繭となる品種を指す。通常の繭に比べて品質は若干劣ることが多いが、鮮やかな緑色の糸が採れることで高級感が生まれ、重宝される。わが国では、安曇野市に所在する「天蚕センター」で継承されてきた以外、あまり普及してこなかった。

中之条町の山田・沢渡地区では、地域の特性を活かした効果的な農業と蚕糸業の両立を模索する中で、数十年前に天蚕繭の導入を試み、安曇野市へ研修に行ったという。しかし、中之条町内の中山間地域での制約された環境と在来農業併用の下での効率的事業に育てるのは難しく、導入を諦める農家が多く、登坂様のみが天蚕飼育を継続してきた。地元中之条町は、これまで、天蚕をほとんど広報していなかったと思われ、知名度も低かったが、近年地域おこし協力隊の職員を登坂様宅に派遣させて、地域創生と技術の伝承を図っており、観光資源としての活性化が期待される。本研究会では、大島・関上が登坂様宅へ2020年７月23日に伺った際、椚の農園で飼育される天蚕繭や資料室を、案内して下さった。また、12月11日には、その天蚕繭による糸繰り業務などを見学させていただいた。

写真１・２　登坂様宅の天蚕事業（上：椚の葉に生育する天蚕繭・７月23日、下：天蚕を煮詰めて座繰り方式で糸を繰る作業・12月11日）

登坂様宅の天蚕は、６～７月に自家の椚農園で飼育して、初夏にその収穫を行う。晩秋から初冬にかけて座繰り工程で糸を繰り、年明けに機織りと翌年度用の蚕卵の装着（室内で１枚の椚葉に30個の卵をガムテープで装着）を行っている。それら一連の作業は、個人経営のため、従来型の手作業が基本で、糸の性格や品質管理の面から、機械による大量生産が不向きでもあるという。登坂様宅で繰り取られた良質の天蚕糸は、専門業者による機械織で、輝緑で品質の高いネクタイなどが製造されていくという。高級な製品に至らない糸は、天蚕の糞で染めたショールなどを製品化し、機械染色とは異なる色彩と肌触りを放っている。なお、登坂様宅は、天蚕を営む他は一般在来農家であり、春と秋には、通常の農業としての田植えや稲刈りが主業務となっている。これらの年間業務や中之条町の山間地域で続く農蚕業の継承とそこで生まれる製品は、地方創生と観光の一環に組み込む要素は大きいし、その産業・技術の継承が望まれ、地方創生や観光の一端を担う象徴となろう。なお、登坂様の自宅庭園には、天皇皇后両陛下（現・上皇上皇后両陛下）がご視察に来られた記念碑を建立し、その脇には、両陛下から贈呈された楓の苗木が植樹されていた。

（3）東谷風穴（あずまやふうけつ）

風穴は、山間地の岩肌で、冷気が吹き出す部分に、蚕種の冷蔵を目的として造られた保管庫である。県内の風穴は、世界遺産に登録された荒船風穴の他、西毛地域に幾つかの痕跡が残り、整備や考察も進んでいる。北毛地域には、沼田市石墨町に利根風穴が、明治末期から戦中まで稼働しており、現在「ぐんま絹遺産」に登録されているが、地形の険しい断崖に所在するため、整備されておらず、見学も困難だという。他県では、冷気によって特有の高山植物などが生育して、それが観光資源化したものもある。東谷風穴は戦後、樹木の種子保管という風穴の機能を高度経済成長期まで維持し続けたことも、産業史を刻む遺産として貴重であり、観光資源化の意義は大きいと考える。

写真３　発掘調査が進む東谷風穴（９月７日）

当風穴は、地域字名をとって当初栃窪風穴と言われたが、東谷山中腹に所在することから、近年は東谷風穴と称されている。2010年、後に世界遺産登録された荒船風穴と共に「荒船・東谷風穴蚕種貯蔵跡」として国史跡に指定され、群馬県世界遺産課は、「ぐ

んま絹遺産」に登録した。

吾妻郡東村の奥木仙五郎、中之条町赤坂の綿貫形次郎らが中心となった蚕種貯蔵業によるもので、１号風穴は、風の吹き出し口の周囲を石垣で囲んだ地上１階・地下２階の構造で、地下１階を蚕種の冷蔵、同２階は氷庫として使用されていた（地上１階は搬入出や整理）と言われる。1906（明治39）年に建設開始され、翌年から第二次世界大戦直前まで蚕種貯蔵が行われた。種紙を15万枚程度保存でき、県内第２の規模の風穴だったと言われる。戦後1947（昭和22）年からは、中之条営林署が植林の林木種子を貯蔵し、1951年以降は、北壁を保護するために石積みされたが、1966年に終業し、外壁や地上部分を取り壊した素材などが、地下部分に埋められた。

2018年以降、当風穴の発掘作業と調査が、専門の調査員数名で進められている。研究所が置かれている旧第五中学校校舎の一部には、発掘されたモルタルの壁や一斗缶などが並べられている。１号風穴の隣に所在した２号風穴は、遺跡の残骸は残るが、まだ未調査のようである。

（４）蚕糸絹関係博物館・資料館

節題の蚕糸絹に関わる全国の博物館･資料館について､毎号の「シルクレポート」（大日本蚕糸会）によると、全国で約100館がリストアップされる。その基準や条件は定める事はできないが、高崎経済大学当局や大日本蚕糸会の支援による調査の下で本研究会は、あくまでも感覚的な要件によるものだが、全国で189館をリストアップして、郵送による調査を行った。うち群馬県では、群馬県立歴史博物館等の総合博物館も含めて、十数館所在すると考察したが、北毛地域では、次の３館に留まっていると考える。

①中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」

②川場村歴史民俗資料館

③蚕・繭・絹の家工房（みなかみ町たくみの里内）

①と②は、町村が運営する従来型の歴史民俗資料館なので、チラシの作成やPRは容易と思えるし、本稿の考察にも記すように、周辺に観光スポットや温泉が多いので、それらと関連させた観光PRを要望したい。③も、北毛観光の重要拠点でもあるたくみの里内に立地するし、機織りや養蚕体験も可能なため、群馬・北毛の蚕糸絹観光の中核として育てたい施設と考える。今後、より多くの蚕糸絹関係資料の効果的展示が要望されるし、絹文化と養蚕民家などの遺産が多く残されていることを考えると、その保存活動などと連携して、体験学習等も可能な博物館が育成されることが望まれる。

（５）蚕糸業先駆者の偉業と形跡

利根沼田地域では、永井流養蚕術伝習所実習棟などが、日本遺産に指定されると、永井紺周郎・いと夫妻の功績が脚光を浴びるようになった。吾妻郡西部では、中居屋重兵衛が、明治初期に横浜での生糸貿易に尽力して、群馬県の生糸産業の発展に貢献した人物として知られる。嬬恋村出身で、吾妻線万座･鹿沢口駅前に顕彰碑（中居重兵衛と記載）が建つほか､同駅界隈に同人の墓が所在し､「ぐんま絹遺産」に登録されている。また、嬬恋村歴史民俗資料館では、彼について系統的な研究が進められ、2020年４～10月に企画展が行われた。

御墓が群馬県史跡や「ぐんま絹遺産」に登録され、江戸時代前期に蚕糸業発展に貢献した人物として、農学者兼医師の馬場重久（1663～死亡は不詳）があげられる。彼は、若い頃から蚕を細かく観察して科学的に養蚕を研究し、民間の蚕書として国内最古と言われている「蚕養育手監」を著している。それを継承して江戸時代中期､北毛にて養蚕発展に貢献した人物として､吉田芝渓（1750～1811）があげられる。幕末以前の養蚕事情やその技術が、群馬ではまだ十分解明されていないといえるが、養蚕を効果的に行う基本を著した『養蚕須知』や『開荒須知』を著した。芝渓については、彼に影響を与えたとされる山崎石燕（儒学者）も含めての顕彰展が、2020年９月中に渋川市役所で行われた。

北毛の絹産業に貢献した蚕糸業に関わる偉人は、これまで影が薄かったが、彼らが、近世や近代初期の日本の近代蚕糸業黎明早期にその発展の基盤を築いたと考察できる。今後、地域をあげて積極的にPRして、観光の一環を担うと共に、絹文化の活性化を期待するものである。

写真４　中居重兵衛の顕彰碑
（万座・鹿沢口駅前、９月６日）

（6）各地区に残る養蚕民家

［1］養蚕民家の概要と「ぐんま絹遺産」

養蚕民家は、蚕の飼育に必要な広大なスペースを要し、棚と大量の桑葉を補充するため、風通しのよい広い部屋が必要で、かつ気象変化には敏感なため、お蚕様と呼ばれて、環境のよい２階部屋で飼われていた。換気をよくするため、茅葺き屋根の場合、屋根の一部を切り落としたり（赤城型）、兜作りとした家が多いが、瓦やスレート葺きの場合、屋根上部に腰屋根（地域によって高窓・卯建と呼ぶ地域もあり、一体型と分散型がある）をつけた独特の造りとなっている。

県南には、田島弥平旧宅と高山社跡の建物が世界遺産登録されたのを初め、10件程度の養蚕民家が単体で「ぐんま絹遺産」に登録されているが、多くは東西中毛地域である。北毛地域では、冨沢家住宅や、旧六合村赤岩の養蚕民家数軒と生活基盤を含めて集落の一部が、「六合赤岩伝統的建造物群保存地区」として日本遺産に認定されたほか、旧鈴木家住宅（沼田市南郷の曲家、利根町日影南郷）、雲越家住宅（みなかみ町藤原）が「ぐんま絹遺産」に登録され、歴史民俗資料館としての機能も有している。これらは、（４）で記したように、展示内容や職員を充実させて、蚕糸絹資料館の性格を強めてほしい施設である。

［2］川場村に点在する多彩な養蚕民家

川場村は、かつての大養蚕地域であり、その遺産は、川場村歴史民俗資料館に多数展示されており、2015年に関係企画展が行われている。多彩な建築様式の養蚕農家が点在し、蚕糸学習観光資源として活性化できると考える。川場村内の養蚕民家は多彩である。屋根が茅葺きで、中央に通風窓や腰屋根が設けられた家屋が残る。スレートまたは瓦葺きの場合、腰屋根は、長い一体型のもののほか、分散型の場合、２つが多いが、５つの腰屋根を有する民家も残る。

川場村は､｢田園プラザ｣が道の駅として全国的に人気が高いし、保存SLが走行したこと（現在走行は停止）でも知られ、酒蔵の人気も高まってきた。残存する養蚕民家を、文化遺産や観光資源としての価値を認識させ、上記の歴史民俗資料館も含めて、在来観光スポットに蚕糸遺産を組み込む事を要望したい。その際、前記した民家の一部は、数年間空き家になっており、屋根が一部歪曲するなど老朽化しているものもあるので、早期に何かしらの文化財や遺産に指定して保存施策が望まれる。

［3］北毛地域の特徴ある養蚕民家

前記以外、各種遺産に登録されたものはほとんど無いが、渋川市街地を離れた旧赤城村以北の農村地域を車で走ると、多数の養蚕民家が残る。また、２章で記すように､廃校となった分校も残り、かつて養蚕で栄えた多くの農村集落が、学校・分校を核として立地していたことがうかがえる。沼田市川田地区内の段丘上の集落や、みなかみ町の合併した旧新治村内の須川・入須川や湯宿地区、旧月夜野町の政所地区などに、顕著に点在している。また、昭和村には、単独ではあるが、生越・糸井地区には、複数の腰屋根をもつ養蚕民家がみられる。

（7）養蚕民家を活用した宿泊･飲食施設

空き家の増加が社会問題となる一方で、古民家の有効活用が叫

写真５・６　川場村に残る養蚕民家（上：数少なくなった茅葺き兜造り、下：腰屋根が５つ付いている民家・12月13日）

写真７　養蚕造りの民家がまだ点在する入須川集落（11月２日）

写真８　昭和村糸井に残る大型養蚕民家（11月６日）

ばれてきた。とりわけ、養蚕民家は、趣ある外観と生活への工夫が凝縮されているので、文化財等で指定して保存・整備して、資料館等で活用できるほか、近年宿泊・飲食施設としての活用が増えつつある。

［1］MAYUDAMAHOUSE

東吾妻町岩下の小高い丘陵に建つ築130年以上の養蚕民家である。地元有志と親交ある首都圏の大学生などがワーキングスペースとして改修した（2016年４月）が、その後日用器具等を整備して、「本物の田舎を知って欲しい」とする民泊施設として、2018年６月オープンした。素泊まりを基本とし、新聞紙上では、１日１組限定の受け入れで、養蚕農家の自給食だった地粉による手打ちうどん作りなど、様々な体験プランが用意されている。

私たち研究会のメンバーは、９月６～７日に宿泊した。その際、夕刻から町の地域おこし協力隊職員や当家での長年の居住者、近隣町民の方々が、うどん粉や地元の採りたての野菜を持ち込んで下さって、うどんの手打ち体験ができた。集まった方々とは、夕食のうどんを食べ、夜遅くまで、地域の歴史や生活・蚕糸農業体験の話題や情報交換に会話が弾む有益な一時だった。建屋は、廃屋の養蚕民家を最小限の改修をしただけの簡易的な宿泊設備だが、数十年前の農村生活の息吹を、安価で感じられる情緒ある一夜を過ごせた。

写真９・10　MAYUDAMAHOUSE での宿泊研修（上：宿泊した本研究会のメンバー、下：夕刻に用意されたうどん打ちを体験・９月６～７日）

翌朝、斜面に広がっていた周辺の桑畑跡地を散策したが、桑摘み作業を思い起こすような光景が広がっていた。東吾妻町は、東西に長く、観光面ではこれまで知名度は薄かったと考えるが、岩櫃城や吾妻峡レールバイク「アガッタン」、伊香保温泉に近い箱島周辺での湧水やそれを利用した魚料理、池の薬師水牢跡など、他に類をみないユニークな観光資源を有すると考える。また、伝統的繊維産業の原料である岩島麻の保存会が残り、伝統技術を守っている。町内にはまだ養蚕民家が所々見られる中で、このMAYUDAMAHOUSEを核として、観光活性化が期待される。３章でも、それらを組み込んだ複数のモデルコースを考察・提案していく。

［2］姉山の家

旧新治村の猿ヶ京温泉街から山里に入った山麓に、一軒家の大養蚕民家が立地する。看板等はなく、途中には桑畑の残骸が続いていた。広報はほとんどなされていない知る人ぞ知る食事処で、囲炉裏を囲んで懇談しながら、季節料理や手打ちそばを提供している。

2020年９月10～11日の群馬県北毛地域を襲った局地的大豪雨で、猿ヶ京周辺は各地で道路が寸断された。ここ姉山の家へ向かう道は、2020年いっぱいは通行止が続くとのことで、営業休止中だが、将来絹遺産観光の一環として活性化したい施設である。

［3］西毛地域にみる養蚕民家を活用した宿泊施設やカフェ

2020年10月10日、箕輪城跡の近くに表記に即した「箕郷矢原宿カフェ」がオープンした。高崎市が、1921年建造の木造養蚕民家を改修し、地域ボランティアによって喫茶や菓子を販売して和室でくつろぐ様式のカフェである。抹茶100円・コーヒー200円・団子90円等、メニューは安価なので、地元の人たちの憩いの場として活用され始めている。箕輪城も近いので、地域の観光拠点としても活用していくという。

2018年、神流町麻生に「古民家の宿 川の音」がオープンした。３基の高窓を残した養蚕農家で、釜戸や囲炉裏も再現しているが、広間や寝室、浴室などの宿泊空間はホテル風に改装されていた。食事の提供を受けると一泊15000円程度になり、温泉ホテル並みの料金が設定されている（11月21日メンバーで宿泊）。近隣で話を聞くと、「当時の面影が薄れるほど、改装しすぎたと思う」との意見が聞かれた。

富岡市西方の南蛇井地区の山里には、昔の面影を残す養蚕民家を改装した宿泊施設「農家民宿ひなた」が、2018年秋にオープンしている。。このように、2018年を境に養蚕民家の宿泊施設開設の気運が芽生えてきたことが考察される。

［4］群馬県南界隈における養蚕民家の分布や活用の事例

藤岡市には、高山社跡の他、町田菊次郎生家宅や縫島家住宅等、養蚕造りの建物が数軒残る。同市に近接し

た埼玉県旧児玉町（現本庄市）には、蚕糸教育などで関係も深く、高窓（たかまど、この地域での腰屋根の呼び名）を４基有する「競進社模範蚕室」が、埼玉県の重要文化財に指定されて整備・保存され、室内展示も充実している。また、その郊外の小平地区には、まだ高窓付きの養蚕民家が数軒残り、その一角には、高窓を３基有する大型で趣きある養蚕民家を改装した手打ちうどんとカフェ飲食店「大門家」が、2020年６月にオープンした。

大泉町では、保存状態の良好な養蚕民家が、大泉町文化村（ホールや展示施設が主体）に移設され、資料館として再生されている（旧対比地家住宅）。また、ぐんま昆虫の森には、赤城型民家に類型される養蚕民家が移設されている。養蚕が昆虫類に含まれる蚕蛾の一環に関わる営みとして、その室内では、養蚕関係器具の展示や蚕の飼育、機織り体験などが行われる。前橋市大室公園にも、赤城型養蚕民家（旧関根家住宅）が移設展示されている（いずれも「ぐんま絹遺産」に登録）。

写真11　養蚕民家を再生した宿泊施設
「古民家の宿 川の音」（11月21日）

北毛地域では、養蚕民家の積極的活用や移設保存された施設は、まだ少ないと考える。今後観光振興の面でも、特色ある養蚕民家の保存活性化を図ることが要望される。

２．学校統廃合と絹文化教育の低迷

2015年度から18年度まで、群馬県世界遺産課は、小中学校へ、「絹文化継承プロジェクト」を募集した。中学校向けの地域の絹文化の歴史調査は初年の応募が６校しかなく、１回で終わったが、小学校向けの蚕を飼ってその生糸で校旗が作られるプロジェクトは2018年度まで４年間続き、各年四十数校が参加した。４回とも参加した学校もあったが、累計参加数を地域的にみると、北毛は極めて低調だった。その要因として、2000年前後の市町村合併に並行して、学校統廃合が急速に進み、学校数が少なくなって、地域との連携が軟弱になっていったことがあげられよう。また、学校統廃合期が養蚕業の急速な落ち込みと重なり、その産業文化の継承が疎かになってしまったことが考察できる。本研究会メンバーの関上は、利根沼田地域の学校統廃合について、昨今研究を進めてきたが、その概要を以下にて明らかにしていく。

（１）利根沼田地域における学校統廃合の地域的特性と傾向

本節ではまず、利根沼田地域で戦後に進展した統廃合について、小中学校に焦点を当て、統廃合の分布を地図化する。そして、地図化やその他の資料等によって明らかとなった地域的特性・傾向を分析し、その要因を考察したあと、利根沼田地域の統廃合にみられる課題を整理し、課題解決に向けた方策を提言していく。そのための研究方法として、「文献調査や各種資料の収集」、「地図と航空写真の活用」、「フィールドワーク調査」の３点を用いた。

【研究方法１】文献調査や各種資料の収集

群馬県教育委員会より得られた「小中学校の設置・廃止・統合」を基礎資料として用いた。同資料は、1956（昭和31）年度から2018（平成30）年度までに群馬県内で設置・廃止・統合された小中学校を、年度別にリストアップしたものである。同資料に掲載されていない統廃合の事例や、1956年度以前の統廃合については、利根沼田地域内の各市町村史を用いて調査した。

【研究方法２】地図と航空写真の活用

国土地理院地図と昭文社の「群馬県道路地図」を利用して、現存する学校の位置特定を行ったほか、地形や交通、集落分布についても把握した。廃校については、埼玉大学谷謙二研究室が公開する「今昔マップ on the web」や、国土地理院が公開する古い年代の航空写真を活用し、位置の特定を行った。

【研究方法３】フィールドワーク調査

利根沼田地域内の廃校跡地に出向いて現地調査を行い、記念碑の確認に努めた。記念碑はすべての廃校に設置されているわけではないが、学校沿革や閉校に至る経緯などが記載されており、歴史的価値がある。また、他地域の統廃合に関する知見を得る目的で、栃木県の小山市立絹義務教育学校を訪問した。

以上の方法等によって明らかとなった、戦後の利根沼田地域で見られる統廃合の特性と傾向を、143頁に［１］～［３］としてまとめた。

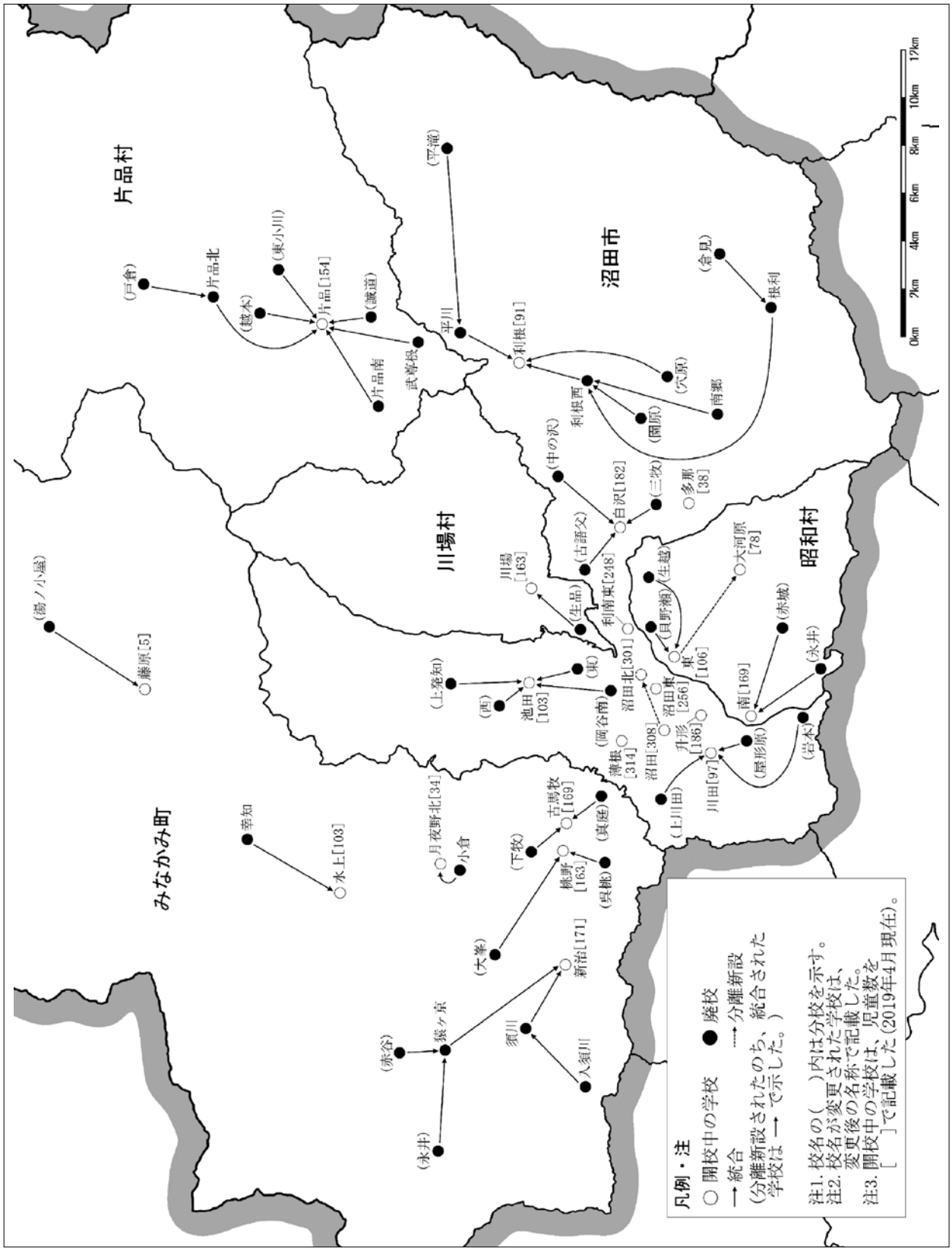

図1　利根沼田地域における小学校統廃合の分布（関上巧作成）

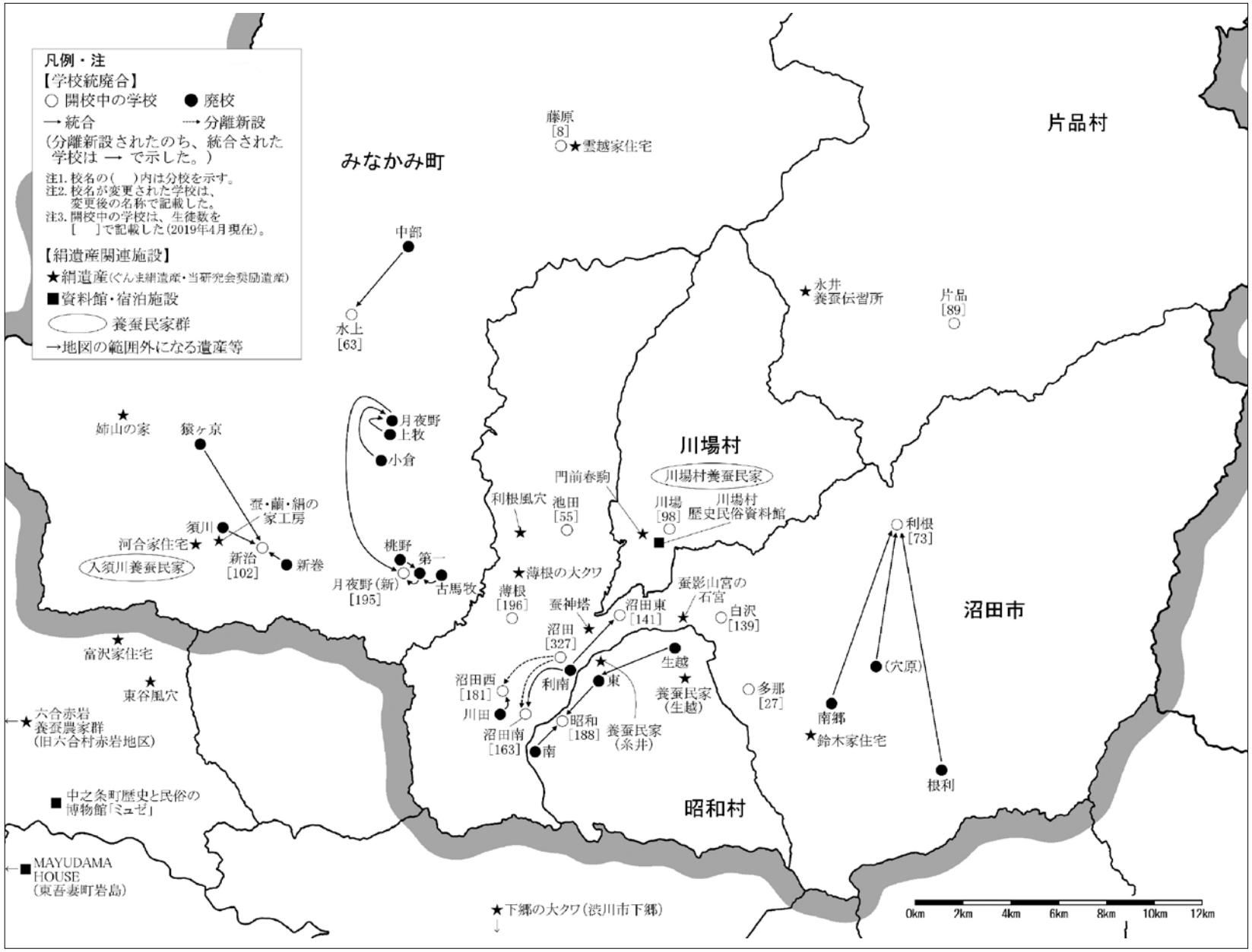

図２　利根沼田地域を中心とした中学校統廃合と絹遺産等の分布（関上巧作成）

［１］統廃合のピークは1960 ～ 70年代・2000 ～ 10年代である

利根沼田地域で統廃合が大きく進展した時期は、1960 ～ 70年代と2000 ～ 10年代の２度である。60 ～ 70年代の統廃合は、1956年の文部省の「公立小・中学校の統合方策について」という通達と市町村合併によって進展したと考えられ、小中学校ともに学校数が大きく減少している。

より細かな年代で見ると、60年代は中学校、70年代は小学校の統廃合が多く、小中学校の統廃合の時期が概ね同一である群馬県全体の傾向と異なる。2000 ～ 10年代の統廃合は小学校が中心で、中学校の統廃合は少ない。

［２］統廃合と昭和・平成の市町村合併に関連性がある

統廃合がピークとなった２度の時期は、市町村合併が進んだ時期の前後に重なっている。統廃合と市町村合併に相関関係があることは、これまでの研究で全国的な視点から示されていたが、利根沼田地域でもその傾向があると分かった。よって、市町村合併を経験した自治体では、合併前後の時期に統廃合が集中的に行われた傾向にある。

このうち、昭和の合併の影響を強く受けたと考えられるのは昭和村と旧月夜野町であり、平成の合併の影響を強く受けたと考えられるのは沼田市利根地区とみなかみ町である。反対に、市町村合併を経験していない地域では、統廃合の件数が少ないか（川場村）、統廃合の件数が多くても時期が分散している傾向にある（片品村）。市町村合併をせずに、市町村境を越えて統廃合された例は殆どないため、市町村合併が統廃合進展の１つの契機になったといえる。

［３］統廃合された学校同士は、類似の地理的条件を持つ

統廃合が実施された学校の分布に着目すると、共通する地理的条件を持つことが分かった。ここで注目した地理的条件とは、地形・交通・集落分布であるが、統廃合した学校同士が、共通する河川沿いや主要道路沿いに立地した傾向にある。共通する河川・道路沿いであれば、それらを結ぶ集落の繋がりが強いと考えられ、統廃合しやすい状況にあったと考える。

一方、同一の市町村内にある周辺校でも、共通の河川・道路沿いに立地しないなど、一定の地理的制約が見られる場合は、小規模校でも統合されずに存続しやすいと考える。これに該当する学校として、みなかみ町立藤原小学校と沼田市立多那小中学校がある。以下に、両校の概要や地理的条件等について記載する。

①みなかみ町立藤原小学校

藤原小は、みなかみ町の藤原地区に位置する小学校である。2019年４月時点での児童数は５人であり、利根沼田地域内では最も少ない。2009（平成21）年の児童数も14人のみであり、当時も利根沼田地域で最小規模だったことから、児童数が少ないながらも、長年に亘って統廃合されずに存続してきた例といえる。みなかみ町で2022・23（令和４・５）年度に実施される予定の統廃合計画では、藤原中学校は統廃合の対象となったが、小学校は存続させ、「コミュニティとしての役割を維持するようにする」と明記されている。

学校規模のみを考慮すれば、統廃合を実施するのが妥当と考えるが、藤原小が統廃合の対象とならなかったのは、豪雪と通学距離の影響が大きいと思われる。藤原地区は、利根沼田地域の中でもとりわけ積雪量が多く、積雪が１ｍ以上になることも多い。また、藤原小の最寄りの小学校は水上小となるが、15kmほどの道のりがあり、自家用車で20 ～ 30分の時間を要する。こうした地理的制約によって、統廃合が難しい状況にあったと推察できる。

②沼田市立多那小中学校

多那小中学校の児童生徒数は利根沼田地域内でも少なく、2015年度は小学校48人、中学校40人である。同年度の利根東小・平川小・利根西小の児童数はそれぞれ57・41・37であり、多那小と大差はない。2019年度の児童数も38人であり、利根沼田地域では３番目に少ないため、学校規模を考えると他校への統合が妥当と思われる。

こうした状況の中、多那小中学校が存続するのは、昭和村との地域的な繋がりにあると考える。『昭和村分校誌』（昭和村分校誌編集委員会、1986年）の生越地区の解説には「むかしこの付近一帯を生越郷とよび、多那、青木、輪組、日影南郷、砂川の各村がその区域で、生越村がそれらの村々の中心であったといわれる」とあり、多那小中学校周辺の地域が現在の昭和村生越地区と地域的に強く結束していたことがうかがえる。地形的に見ても、多那地区一帯は小河川を挟んで昭和村と隣接し、標高も概ね同等であるため、昭和村方面へのアクセスは良好と考える。

写真12　多那小中学校の校舎（11月６日）

一方、利根地区から他地域へ向かうには、谷を数回渡る必要が

あり、アクセスは悪い。また、直線距離では近距離の白沢小中学校へも、河岸段丘によって交通が隔てられており、大きく迂回する必要がある。以上のことから、多那小中学校が仮に他校と統合する際、通学利便の観点でいえば、利根・白沢地区の学校と統合するより、昭和村内の小中学校と統合するのが合理的だといえる。しかし、市町村を越えた統廃合は、利根沼田地域をはじめ関東地方では一般的でないため、他校に統合されないままだったと考えられる。

（２）学校統廃合の功罪と展望

前節では、学校統廃合が文部省の通達や昭和・平成の市町村合併によって進展したことや、統廃合が実施された学校同士は類似の地理的条件を持つことなどを示した。文部省の通達が学校統廃合に直接的な影響を及ぼしたことや、類似の地理的条件を持つ学校が統合されやすいことについては言うまでもないが、市町村合併と学校統廃合のピークの時期が重複したことについては、その要因を考察する余地がある。

［１］市町村合併が統廃合と重なる要因

市町村合併を行う理由の１つに、財政基盤の強化がある。沼田市・白沢村・利根村合併協議会は、「地方財政の見通しが極めて不透明な中、住民サービスの充実や安定的な供給を図るためには、自治体が一定規模を持つことで行財政基盤を強化していく必要性が高まっています」と説明しており、新市建設計画で「公共施設の統合整備」を掲げている。

また、みなかみ町が2007年に出した「みなかみ町行政改革大綱」では、「改革の取組項目」として「組織機構の見直し」が挙げられ、公共施設を必要に応じて廃止・縮小・統合する旨が記載された。したがって、学校統廃合は市町村合併による行政改革の一環として行われ、施設維持費や人件費等の負担軽減を目指す、行財政上の問題として扱われた側面があると考える。

［２］統廃合の効果と課題

市町村合併による行政改革として学校統廃合は進展してきたが、その人件費抑制の効果は大きい。例えば、「平成30年度群馬県の決算」によると、歳出総額７,280億円のうち教育費は１,662億円（歳出総額の22.８％）であり、教育費のうち１,499億円（教育費の90.２％）は教育関係人件費である。統廃合が進むことで学校数や教職員数は必然的に減るため、人件費が大きく削減されることになる。また、統廃合による人件費削減効果の研究では「２校を１校に統合する場合は数千万円規模、３校以上を１校に統合する場合は数億円規模の人件費を削減する効果が見られた」という。

しかし、統廃合当事者（保護者など）に統廃合の効果が説明される際、財政効率化が取り上げられることは少なく、教育活動の充実に重きが置かれると考える。例えば、みなかみ町は、2022・23年度に実施予定の町内小中学校統廃合に向けた準備として、保護者アンケートを行ったが、そこでは子どもの意見尊重を求める声や生徒が安心・充実して過ごせる施設整備の要望、通学体制に関する意見などが多かった。つまり、保護者の関心は子どもの教育環境向上にあると分かる。したがって、学校統廃合は市町村合併と併せて、各市町村の財政効率化の一環として行われ、教育効果の問題も含んで議論がなされてきたといえる。しかし、こうした統廃合の方策については、以下２点の課題が考えられる。

第一に、市町村合併による市町村域の広域化に伴い、学校統廃合の範囲も広域化するため、通学に無理が生じる可能性がある。例えば、2022年度に実施予定のみなかみ町の統廃合で、藤原地区の中学生が現在の月夜野中まで通うことになるが、スクールバスを利用するとしても、片道で50分程度の時間が掛かると予想する。

50分という通学時間は文科省が示す統廃合の条件には合致するが、通学距離は30kmに迫るため、相応の負担が掛かることは避けられない。また、沼田市利根地区の多那小中学校も、仮に統廃合が検討され、沼田市内の他校と統合することになる場合、起伏の多い地形のため通学上の制約を受ける可能性が高いといえる。

第二に、文科省が示す統廃合の教育効果に関しては、懐疑的な意見が見られる。齋藤尚志（2018）は、文科省が示す統廃合の手引では「教育的な観点」（集団での切磋琢磨、社会性育成）が客観的根拠なしに強調され、小規模校や少人数の負の側面が掲げられていると指摘する。また、スクールバス通学については、一部の児童生徒がバス通学転換後に新たな疲労を感じているものの、そのことを地域住民があまり認識していないとの問題が指摘されており、小学校４km、中学校６km（豪雪地帯の場合は小学校２km、中学校３km）以上とされたスクールバスの導入基準も、通学の安全確保の観点から実態に合わないとの指摘がある。

したがって、教育効果の向上を理由に、統廃合の議論を進めたり教育内容の充実を図ったりすることで、十分な科学的根拠が担保されずに統廃合が進むおそれがある。以上より、統廃合後の教育内容の充実に関しては、教育効果とは別視点から検討が必要だと考える。

（３）学校統廃合をめぐる課題の改善策

学校統廃合によって財政効率化が実現される反面、通学体制や教育内容充実に関する課題が生じることを示した。以下では、これらの課題への対処として、筆者が有効と考える方策を、２点提示する。

［１］一部事務組合立学校の設立

一部事務組合とは、総務省によると「普通地方公共団体がその事務の一部を共同して処理する」ことを目的に設立される、特別地方公共団体である。2020（令和２）年12月現在、全国に1600以上の一部事務組合があり、その部門は介護・消防・環境など多岐に亘る。このうち、学校組合は全国で30ほどに留まり、関東地方には２つしかなく、群馬県にあるのは、利根商業高校を管理する利根沼田学校組合（沼田市・片品村・川場村・昭和村・みなかみ町）のみである。一部事務組合立の小中学校は県内にはなく、学校設置者は市町村単位が基本となっている状況にある。小中学校の一部事務組合の事例として挙げられるのが長野県で、県内に５つの学校組合があり、全国最多である。これらの組合立学校は、いずれも複数市町村に学区が跨がる。

複数市町村で学区を設定できる一部事務組合立学校を設立することで、統廃合による通学体制の課題がある程度解決されると考える。（１）で取り上げた、小規模校で統廃合が検討されていない学校（藤原小、多那小中学校）のうち、多那小中学校は昭和村内の学校との統廃合が合理的と示したが、これが実現可能となる。市町村の境界を越えない従来の統廃合では、学校同士の距離が近くてアクセスが良好でも、市町村が異なると統廃合しにくい状況にあるが、一部事務組合方式によって、そうした問題に対処しやすくなるだろう。利根沼田地域には、利根沼田学校組合が既にあるので、これを活用して通学体制をより柔軟に検討できると考える。

［２］地域資源を生かした教育内容

一部事務組合を活用することで、通学体制の問題解決に繋がることを示した。しかし、注意点として、これから検討されるすべての統廃合を一部事務組合方式にすればよいわけではない。地域事情によって、一部事務組合方式が困難だったり、適さなかったりする場合があると考えられるからである。小規模校で統廃合が検討されていない学校のうち、藤原小がこれに該当すると考えるが、一部事務組合方式で統廃合を検討するとしても、みなかみ町に隣接する沼田市、川場村、片品村にある学校は遠距離のため、統廃合は現実的でない。さらに、町内最寄りの水上小へも距離があることから、藤原小は単独で存続させるのが妥当だと考える。

しかし、小規模校ゆえ、配置される教職員数は必然的に少なくなるため、教育内容の充実については、慎重に検討しなければならない。また、一部事務組合の学校も、統合前の学校・地域の文化を継承することや、地域への愛着に課題が生じる懸念があるため、充実した教育内容を吟味する必要がある。教育内容の充実については、従来から唱えられる教育効果を根拠とするのは不適と考えるため、別視点からの検討が必要である。別視点からの検討にあたっては、**小山市立絹義務教育学校**の取り組みが参考になると考えるため、以下でその概要を紹介する。

絹義務教育学校は、小山市絹地区に所在する栃木県下初の義務教育学校で、2017（平成29）年にそれまでの福良小・梁小・延島小・絹中が統合して誕生した。絹地区の南は茨城県結城市と隣接し、一帯はかつての養蚕地帯で「本場結城紬」の一大産地である。同校では「ふるさと学習」と称して、１年生から９年生までの全学年が、本場結城紬の生産工程を学べるようにカリキュラムが組まれている。本場結城紬の体験学習にあたっては、地域ボランティアが児童生徒と直接関わりを持つほか、学校運営協議会で意思決定に加わる機会も設けられており、いわゆるコミュニティスクールとしての機能を有している。地域住民が学校の教育活動に積極的に参加しやすい仕組みを作り、本場結城紬という地域資源を教育内容に盛り込むことで、学校と地域の一体感を生み出していることが、同校の特長といえよう。

写真13　絹義務教育学校（元絹中校舎）
元絹中が後期課程で、裏側の元福良小が前期課程で使われる
（９月15日）

利根沼田地域も絹地区と同様、かつての養蚕地帯であり、養蚕関係の遺構が数多く残っている。そのため、学校の教育活動において、養蚕にまつわる内容を学ぶ意義があると考えるが、地域全体での養蚕への興味関心は低調だったように感じる。実際、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された翌年度から、県世界遺産課主導のもと「絹文化継承プロジェクト」が実施されたが、群馬県全体での参加校が81校だったのに対し、利根沼田地域内の参加校は片品小１校のみだった。そして、統廃合が進むなかで、養蚕の文化や歴史を学校教育で学ぶハードルは一層上がり、地域資源の教育への活用に課題が生じてきたと考える（入須川の

養蚕民家や南郷の旧鈴木家住宅など、図２参照)。絹義務教育学校のこうした取り組みは、統廃合を通して地域資源を教育活動に活かし、教育内容の充実に努めてきた事例であり、利根沼田地域の学校でも積極的に導入されることが望ましい。

以上のように、地域資源にまつわる内容を学校教育に取り入れることで、統合せずに残る学校でも、統合して新たに生まれ変わる学校でも、教育活動の充実が図られるだろう。統廃合が今後検討されていく中で、養蚕をはじめとする地域資源を教育に反映させることが、利根沼田地域の教育環境向上に貢献していくと考える。

３．絹遺産を主軸とした観光モデルコースの策定

群馬県内の在住者は、自家用車による移動に慣れているし、路線バスは、極めて不便な地域が多い。そのため、観光スポット相互が多少離れていても、自家用車やレンタカーを利用して、観光スポットを効率的に組み会わせて線で繋げば、モデルコースが形成できる。

一方、公共交通機関を乗り継いだ観光ルートの設定は、群馬県内では難しいが、研究会代表の大島は、2015年以降各年で６回、観光キャンペーン期間に合わせて、観光物産国際協会に協力して、「列車とバスで行くとっておきのぐんまを巡る旅」(JR公認の「小さな旅」シリーズ）を提案・監修・作成してきた。そこでは、群馬県内では極めて不便と言われる路線バス時刻を組み込んで、それに即して観光スポットを巡り、温泉宿泊するモデルコースを提案している。本数の少ない不便なバスでも、バスの運行時刻を確認しながら乗り継げば、効率的に観光できることを提示してきた。これらの業務や見聞を活かして、北毛地域において、絹遺産に主眼を置きつつ、在来の主要観光スポットを組み込んだモデルコース素案を、（２）～（４）の３種類の移動形態（パターン）で提案していく。

（１）近年のスタンプラリーを併用した観光モデルコースとその課題

「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録（2014年）後、群馬県内の絹遺産は脚光を浴び、それ以外に価値ある資産を「ぐんま絹遺産」として登録してきた。2015年に「かかあ天下 ―ぐんまの絹ものがたり―」が日本遺産に認定されると、群馬県はさらに、スマートフォン公式アプリ「きぬめぐり」を整備し、絹遺産を容易に巡回できる情報提供体制を構築した。その過程で、旅行モデルコースや周遊バスの運行が企画されてきた。2020年には、「日本遺産×きぬ旅スタンプラリー」（９～12月）が、日本遺産認定資産が所在する４市町村毎に４コースを網羅したスタンプラリーを含めた観光モデルコースが提示されている。しかし、同一市町村内を、自家用車で巡回するだけのコースだった。

前橋市（前橋市文化スポーツ観光部文化国際課主催）は、2020年11月中を期間として、単独で「まえばしシルクスタンプラリー」を実施していた。しかし、スタンプ押印ポイントが市街地の駅や資料館のみ、30分程度歩いて巡回できる簡単なスタンプラリーだった。また、チラシには、市内の由緒ある絹遺跡が記載されてはいたが、その地図上の一部の遺跡が所在位置と異なって表記されているなど、チラシ自体の不備も考察された。

いずれも、チラシには、スタンプラリーを併用した観光スポットの名称のみで、個々の説明や歴史的意義・背景などはほとんど説明されておらず、アプリを使いこなす高いハードルを感じたし、全県的には話題にならず、応募状況も十分ではなかったと思われる。

ここでは、そうした課題も踏まえ、かつ同一スポットは何度も重複しないように、観光モデルコースを編成した。自治体で巡回バス等のコースを企画する場合や、個人旅行として巡回する場合、北毛地域全体の事情を見据えて、適宜にアレンジした計画策定をお勧めしたい。

（２）鉄道と路線バスで巡回するコース（コース名と起点駅に到着する列車を併記）

移動の時刻やスポットは限定されるので、バス時刻と乗り継ぎを記載したモデルコースを提示する必要がある。行動や時間は制約されるが、首都圏から公共交通機関を利用して来県する観光客も多い。その場合、列車の時刻は容易に分かるので、最寄りの鉄道駅までは行けるが、そこからの二次交通としての路線バスの運転時刻や本数が容易に分からない。予約や車の運転には気を遣わず、気ままに出かけられるのが特徴だ。以下バス路線・系統と時刻を記載して、モデルコースを提案していく（徒歩の所要時分は大まかで、実際と異なる場合あり)。なお、列車・バスは、2020年10月現在の時刻による。

［１］川場村の遺産と田園プラザコース（上越線下り列車沼田駅着10:20）

沼田駅10:30発（川場村循環線左廻りバス）→田園プラザ10:52着（田園プラザで見学・買い物・昼食）→（徒歩10分）→川場村歴史民俗資料館（見学、木造の学校校舎、養蚕関係展示多数）→（徒歩５分）→ホテル田園

プラザ（日帰り入浴、SL見学）→（徒歩15分）→吉祥寺（四季折々に開花）→（徒歩10分）→天神周辺（周辺に養蚕民家あり）・天神バス停（15：58発川場村循環線右廻りバス）→沼田駅16：40着（沼田駅発上り列車17：01）

［2］谷川ロープウェー・宝川温泉と養蚕遺産コース（上越新幹線下り列車上毛高原駅７：54着）

上毛高原駅（８：04発谷川岳ロープウェー行バス）→８：49谷川ロープウェー（ロープウェー往復）10：25発→10：35大穴（10：55発湯ノ小屋行バス）→11：19宝川入口（宝川温泉の送迎で入浴・食事→（徒歩30分、奥利根民俗集古館・雲越家住宅などを見学）→久保バス停（14：48発水上駅行バス）→水上駅15：22着（水上駅発上り列車15：53）

［3］吾妻線沿線の絹遺産見学コース（上越・吾妻線下り列車渋川駅９：19着）

写真14　渋川市の「下郷の大クワ」沼田市の「薄根の大クワ」と共にぐんま絹遺産に登録されている（12月14日）

「下郷の大クワ」と近接する日本シャンソン館を見学（駅から徒歩10分）→渋川駅（11:10発万座･鹿沢口行列車）→中之条11:37着→（徒歩10分）→歴史と民俗の資料館ミュゼ見学・昼食→（徒歩10分）→中之条駅（13：50発万座・鹿沢口行列車）→万座・鹿沢口14：56着（15：09発軽井沢行バス）→鎌原観音堂前15：15着（鎌原観音堂と嬬恋村歴史民俗資料館見学）→（徒歩）→万座・鹿沢口駅前（帰路は適切なバスがないので徒歩約30分、中居重兵衛顕彰碑、さらに御墓を見学）→（徒歩20分）→万座・鹿沢口駅（17：36発吾妻線上り列車）

［4］東吾妻の歴史遺産巡りコース（吾妻線下り列車群馬原町駅９：52着）

群馬原町駅から岩櫃山登山（約２時間、食事）→群馬原町駅13：55発万座・鹿沢口行列車→岩島駅14：07着→アガッタン（レールバイク）に乗車（乗り場まで徒歩約15分）→（徒歩５分）→天狗の湯（入浴）17：10発→（天狗の湯循環線バス）→岩島駅前17：17着

・現地宿泊の場合：次の施設を奨励（翌日下記（３）定期観光バス等の［１］［２］コースの利用可能）
　MAYUDAMAHOUSE（養蚕民家）宿泊（徒歩10分、うどん打ち・地元の方々との懇談の場が設定）
　川中温泉の旅館宿泊（山間ののどかな１軒宿、天狗の湯に近い）
・日帰りの場合：岩島駅発18：02高崎行に乗車して帰路

（3）定期観光バスや観光巡回タクシーを設定

群馬県における定期観光バスは、交通手段や観光形態が多様化する中で縮小し、現在は伊香保榛名コースだけとなった。定常的に運行されている観光スポットを巡回するバスも、みなかみ温泉街や富岡町中バス、桐生市の電動バス等が、限定された狭い範囲を巡回するに留まっている。高原や公園での開花シーズン等、期間限定で運行されるものもあったが、筆者が知る限りでは、それらのバスの運行は、直前に決まるので、PRに乏しく概して需要は低迷してきた。城巡りブームが昨今強まりつつも、2019年に上州３城巡りバスが、DCキャンペーン期間に、わずかな日数のみ運行される程度である。

しかし、自治体や観光協会主導で、絹遺産も含めた観光活性化を目指した定期観光バス（タクシー）は、地域遺産をPRする効果も含めて、運行価値は大きいと考える。その場合、個人の養蚕民家や平常解放していないスポットなどを組み込むのが有益であろう。需要や反応は読めない部分が大きいので、当面、次のコースを提案し、試行的に短期間の土休日に限定して試験運行することを要望したい（車両も当面ワゴン車で対応）。

［1］東吾妻町の各種遺産巡りと榛名湖コース（上越・吾妻線下り列車渋川駅９：19着列車に接続）

渋川駅９：30発→箱島湧水と池の薬師水牢跡見学（10：00 ～ 10：30）→（養蚕民家と大戸関所跡を車窓見学）→須賀尾宿見学（11：00 ～ 11：20）→かやぶきの郷で休憩（11：30 ～ 13：10、昼食・入浴可能）→茗荷の里（13：30 ～ 13：50、２基残る農村の風物詩である水車の見学と買い物）→14：30榛名湖着（ツアー終了・解散、湖周辺を観光して、適宜に高崎・伊香保方面へ路線バス乗り継ぎ（榛名湖発高崎行バス時刻15：30、16：40、17：10で途中榛名神社の見学も可能・伊香保行は16：05、16：35）。

［2］中之条町の養蚕遺産や群馬鉄山を巡るコース（中之条駅９：47着吾妻線下り列車に接続）

中之条駅10：00発→歴史と民俗の博物館「ミュゼ」（10：10 ～ 10：40）→登坂家天蚕見学11：00 ～ 11：40→花楽の里（昼食、12：20 ～ 13：20）→六合赤岩養蚕集落（13：50 ～ 14：30）→旧太子駅跡（14：40 ～ 15：20）→六合支所付近（冬住の里資料館・吾嬬橋を見学、15：30 ～ 16：00）解散

・旧六合村内または草津温泉宿泊の場合：このバスを花敷温泉経由で草津温泉まで運行
・日帰りの場合：六合支所発長野原草津口行16：10発路線バスに乗車→長野原草津口駅16：27着・16：39発高崎行（バス運賃は無料とする便宜を図る）

［３］利根沼田の養蚕遺産や木造校舎の資料館見学コース（沼田駅９：13着上越線下り列車）

沼田駅９：20発→糸井・生越の養蚕民家→南郷の曲家・旧鈴木家見学→吹割の滝（11：00 ～ 11：40）→旧武尊根小学校（廃校の趣ある木造校舎・体育館見学）→花咲の湯（昼食・入浴、12：30 ～ 14：00）→永井流養蚕伝習所実習棟（14：15 ～ 14：30）→川場村（養蚕民家と酒蔵を見学して試飲、田園プラザで買い物（15：00 ～ 16：30）→沼田駅16：50着（上越線上り列車17：04発）

（４）自家用車・レンタカーを活用したモデルコース

自家用車コースは、時間の制約がない上、自分のペースで廻れるので、柔軟に走行でき、かつ多くの観光スポットに立ち寄る計画が組める。ただし一方で、路線バスや自治体主導の循環バスを利用する旅行に比べると、不慣れな道を運転する不安や疲れが伴うので、敬遠する観光客も多い。（３）の定期観光バス等と類似した部分もあるが、自家用車なので個人の養蚕民家や酒蔵は含んでいない。

［１］旧新治・中之条の絹遺産コース：月夜野IC・上毛高原駅レンタカー（列車は９：22着）を拠点

上毛高原駅９：40発→たくみの里（蚕・繭・絹の家工房で座繰りや繭玉細工等体験10：00 ～ 12：00）→姉山の家（昼食、12：30 ～ 13：20）→冨沢家住宅（14：00 ～ 14：20）→東谷風穴（15：00 ～ 15：40）→渋川駅（16：51発上り列車）・渋川伊香保IC

［２］旧六合村コース：渋川伊香保IC・長野原草津口駅レンタカー（列車は10：19着）を拠点

長野原草津口駅10：30発→チャツボミゴケ公園（11：10 ～ 12：00）→道の駅六合（昼食・入浴、12：40 ～ 14：30）→太子駅跡（14：40 ～ 15：00）→六合赤岩養蚕集落（15：10 ～ 16：00）→長野原草津口駅（16：39発上り列車）・渋川伊香保IC

［３］利根沼田コース：沼田または昭和IC・沼田駅レンタカー（列車は９：17着）を拠点

沼田９:30発→南郷の曲家（旧鈴木家住宅）・しゃくなげの湯（昼食、10：30 ～ 12：30）→吹割の滝（12：50 ～ 13：30）→永井流養蚕伝習所実習棟（14：00 ～ 14：30）→川場村田園プラザ（15：00 ～ 16：00）→沼田IC・沼田駅（17：04上り列車）

絹遺産を主体とした北毛地域限定のモデルコースは、まだ個々のスポットの知名度が低いので、観光協会等がPRしないと浸透し難いし、観光を通じた商品の販売力は乏しいと考える。したがって、まず、（３）で提案した定期観光バス等を、何かしらの形で運行することが望まれる。

自治体や観光協会が主導する定期観光バスは、2000 ～ 2005年頃にかけて、旧水上町内や吾妻地域各方面で運行されていた。水上地域では、「みなかみシャトルバス 温泉ぶらり号」として、水上駅を起点に３コース（バス３台）が運行され（１日フリーパス500円）、それなりに集客していたことを思い出す。また、JRと連携した無料巡回バス「ぐるりん吾妻号」が中之条、長野原、万座・鹿沢口各駅を起点に、毎年数コース設定されていた。これらは、期間限定ではあったが、コース内に絹遺産も含まれていた。費用対効果が不十分だったことや、平成の合併を契機に縮小・廃止に

写真15・16　旧六合村赤岩重要伝統的建造物群保存地区（上：かいこの家・下：湯本家の土蔵造り３階立ての主屋・12月11日）

写真17　利根町南郷の曲家（旧鈴木家住宅）
隣接する「しゃくなげの湯」での入浴や食事とセットで楽しめる。（11月６日）

向かったようだが、類似の巡回バスの再生・復活が望まれるものである。また、モデルコースを提案する案内のチラシは、資料的に付加価値の高い資料を作成することを望む。

群馬県の絹産業やその遺産は、各種遺産や文化財指定等で、その意義や現況は広報されてきた。北毛地域においても、絹遺産の一層の活性化を進め、自家用車やレンタカーに頼らなくても、富岡製糸場や碓氷製糸など、知名度が高まった観光スポットとセットで訪れてもらえる土俵作りが要求されよう。

主要参考文献

・大島登志彦「鉄道の発達からみた群馬の産業史とその遺産の点描」『群馬・産業遺産の諸相』（2009年、高崎経済大学附属産業研究所編・日本経済評論社）
・大島登志彦「群馬県における観光資源としての産業遺産活性化に向けた動向と課題」『観光政策への学際的アプローチ』（2016年、高崎経済大学地域科学研究所編・勁草書房）
・大島登志彦「近年の富岡製糸場の動向と操業する製糸工場にみる蚕糸絹文化」『日本絹の里紀要』第18号（2016年）
・大島登志彦「製糸工場の盛衰にみる産業考古学からのアプローチ」『富岡製糸場と群馬の蚕糸業』（2016年、高崎経済大学地域科学研究所編・日本経済評論社）
・大島登志彦「『富岡製糸場と絹産業遺産群』の世界遺産登録と地理教育における蚕糸絹文化」『地理教育研究の新展開』（2016年、山口幸男他８名編・古今書院）
・大島登志彦「日本の蚕糸業の歴史・文化伝承の取り組み －関連博物館・資料館や学校での実践－」『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』（2018年、高崎経済大学地域科学研究所編・日本経済評論社）
・群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編９（近代現代３）』（1990年、群馬県）
・群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局『群馬県教育史 第四巻（昭和編）』（1975年、群馬県教育委員会）
・「列車とバスで行くとっておきのぐんまを巡る旅」（2015～2020年に６冊刊行、大島登志彦監修・ググっとぐんま観光宣伝推進協議会）
・「絹関連地域資源マップ 絹の道」（2015年、経済産業省 関東経済産業局 産業部流通・サービス産業課）
・「絹の国ぐんまを語る」（2016年、群馬県企画部世界遺産課）
・「わが町の文化財　東谷風穴」（「花と湯の町 なかのじょう」2019年７月号）
・「ぐんま絹遺産ガイドブック」（群馬県 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会）
・「日本遺産 かかあ天下 －ぐんまの絹物語－」（群馬県企画部世界遺産課）
・「小中学校の設置・廃止・統合　昭和31年度～平成30年度」（群馬県教育委員会）
・「管内小学校・中学校・幼稚園・教育委員会一覧」（利根教育事務所）

そのほか、現地で入手した資料・パンフレット等を、随時参照しました。
本文中の写真は、全て研究会メンバーが撮影したものです。